

## 行智の悉曇学とその発達段階

肥 爪 周 二

江戸後期の悉曇学者、行智（安永七年〜天保十二年）の人と学問については、明治時代より、仏教学者・国語学者・中国語学者・文献学者などによって、それぞれの立場から研究が進められてきている。<sup>(注)</sup>とりわけ、近年の湯沢質幸氏の一連の論考は、国語学の立場から詳細な分析を行い、漢字音研究史上における、行智の位置づけの見直しを試みていて注目される。<sup>(注)</sup>

行智の学問のうち、国語学の立場からは、漢字音研究が早くから注意されてきたのであるが、行智の著作には、当時の江戸語の音声についての記述も多く含まれ、国語音韻史の資料としても貴重である。しかし、漢字音研究にしても、江戸語音声観察にしても、あくまで悉曇学の中に取り込まれたものであり、それ自体は行智の学問の手段に過ぎない。したがって、国語学の立場から行智の業績を参照する場合も、行智の悉曇学についての理解が不可欠であるのは当然のことである。

従来まったく注意されていないのであるが、行智の学問内容は、その時期によって大きく異なる。そして、それぞれの時期の著作が（多くは自筆本で）現存している点、行智に関する研究条件は非常に恵まれていると言える。たと

えば、代表作といえる「悉曇字記真釈」をとってみても、文化十二年の三卷本、翌十三年の五卷本、天保三年の八卷本、天保七年の重訂八卷本と、少なくとも四つの段階のテキストが現存している。<sup>(註3)</sup>したがって、行智の学問の発展過程は、かなり詳細にたどることができるのである。

これまでの研究では、八卷本「悉曇字記真釈」、「梵漢対訳字類編」などの、行智の学問の完成段階の著作のみが注目されてきた。そのため、初期の著作を参照しなければ、決して起こらないような誤解があったのも事実である。行智の学問の発達過程、すなわち行智の試行錯誤の過程をたどることによって、行智の学問が達成したものが何であったのか、いっそう明瞭になるのである。

本稿では、行智の悉曇学が、どのような過程を経て完成したのかという点を明らかにする。悉曇学の発達過程と、漢字音研究・江戸語音声観察がどのように関わるかについての詳細は、別の機会に論じたい。

本稿では、行智の著作を、内容によって、以下のように第一期・第二期・第三期の三つの段階に分ける（韻学関係の著作に限って挙げる）。括弧内は使用したテキストを示す。

### 第一期

文化十二年 「悉曇字記真釈」三卷本（茨城大学附属図書館蔵本 卷三は東京大学総合図書館蔵行智自筆本による）

文化十三年 「悉曇字記真釈」五卷本（東京国立博物館蔵行智自筆本）

「梵学須知」（都立中央図書館蔵行智自筆本）

「梵字名目」（東京国立博物館蔵行智自筆本）

第二期

文政二年

〔校正悉曇字記〕(刊本)

〔諺文考〕(都立中央図書館蔵本)

文政三年

〔悉曇字記真釈私録玄談〕(国会図書館蔵行智自筆本)

文政八年

〔梵文対註字類集〕(駒澤大学付属図書館蔵行智自筆本)

文政十一年

〔悉曇字記 付攷文〕(都立中央図書館蔵行智自筆本)

〔悉曇字記真釈諺談〕(未詳 第一期成立 国会図書館蔵行智自筆本)

第三期

天保三年

〔悉曇字記真釈〕八卷本初稿(国会図書館蔵天保八年写本)

天保四年

〔悉曇字記正文〕(刊本 都立中央図書館蔵行智書き入れ本)

天保五年

〔諺文解〕(駒澤大学蔵行智自筆本)

天保六年

〔梵漢対訳字類編〕(刊本 宝蔵館複製本)

天保七年

〔悉曇字記真釈〕重訂八卷本(都立中央図書館蔵行智自筆本)

〔洪韻解益〕(未詳 天保六年以降成立 東京大学総合図書館蔵本)

行智の代表作である「悉曇字記真釈」は、書名からも明らかのように、唐・智広の「悉曇字記」の注釈である。日本悉曇学は、「悉曇字記」の研究を中心に進められてきたと言っても過言ではない。ユニークさで際だつ行智の研究も、そうした日本悉曇学の流れに沿ったものである。すでに触れたように、「悉曇字記真釈」には、少なくとも四つの段階のテキストが存在する。これと並行するように、行智は「悉曇字記」の校訂も行っているのだが、こちらは三つの段階のテキストが現存している。これらの関係を年表にすると、〈表一〉のようになる。

〈表一〉

「悉曇字記」の校訂		「悉曇字記真釈」	
文政二年	【校正悉曇字記】(刊)	文化十二年	三卷本
文政十一年	【悉曇字記 付攷文】	文化十三年	五卷本
天保四年	【悉曇字記正文】(刊)	天保三年	八卷本(初稿)
		天保七年	八卷本(重訂)

「悉曇字記真釈」そのものも、「悉曇字記」の注釈と同時に、校訂をも意図したものであるのだが、日本の悉曇学史上、行智ほど「悉曇字記」の成立と組織の解明に真摯に取り組んだ学者はいなかったと言つてよい。

「悉曇字記」の成立については、現在でも不明な点が多い。著者である智広についても、智広に悉曇を伝授した般若菩提三藏についても、その伝記は明らかではない。本文に關しても、現存テキストで内容的に重複する前段と後段との關係には、後人増補説を含め諸説ある。また、日本の注解の混入の可能性も指摘されているが、<sup>(注4)</sup>具体的にどの部分がそうであるのかという点も不明である。

行智は、「悉曇字記」の成立と組織について、詳細な分析を通して大胆な推定を行い、それを「悉曇字記」の校訂に反映させている。参考までに、「悉曇字記」の本文と「悉曇字記真釈」の諸本の巻次の対応を〈表二〉に示す。「悉曇字記」については、第一期より行智が参照していたことが判明している寛文九年澄禪開板本によつて、本文の位置を示す。「悉曇字記真釈」の八巻本は初稿本・重訂本ともに注釈箇所の巻配分は同じである。

一見して明らかのように、八巻本では注釈の順序が、寛文九年板「悉曇字記」の本文の順序に一致していない。これは、行智が、第二期末の「悉曇字記 付攷文」(文政十一年)以降、「悉曇字記錯簡説」を採用したためである。

先述したように、「悉曇字記」は、前段と後段とで内容の重複がある。現存「悉曇字記」の構成を簡潔に整理するならば、梵字の来由等を説く序、摩多・正文の略説、十八章建立の略説、摩多・正文の詳説、十八章建立の詳説という五つの部分から成り立っている。<sup>(詳5)</sup>すなわち、A B C B C という構成になっているのである。行智は、これを錯簡と判断し、A B B C C という入れ替えを行つている(Cの部分は、後人の増補と見なし、八巻本では付録に回されている)。

行智の「悉曇字記」の組織についての考えは、当然の事ながら、「悉曇字記真釈」のみならず「悉曇字記」の校訂

にも色濃く反映している。

〈表二〉

C		B			A		寛文九年板「悉曇字記」		
十七ウ⑤ ～二十八ウ①	十五ウ① ～十七ウ④	十二ウ① ～十五ウ⑦	十二オ④ ～十二オ⑦	十オ⑦ ～十二オ③	九オ⑥ ～十オ⑥	八ウ① ～九オ⑤		五オ⑥ ～八オ⑦	三ウ② ～五オ⑤
卷三			卷二			卷一		三卷本	
卷五	卷四		卷三	卷二		卷一		五卷本	
付録	卷五	卷四	卷三	卷八	卷七	卷六	卷二	卷一	八卷本

第一期の「校正悉曇字記」(文政二年刊)においては、摩多・体文の部分の梵字を、印度式に左横書きに配列する

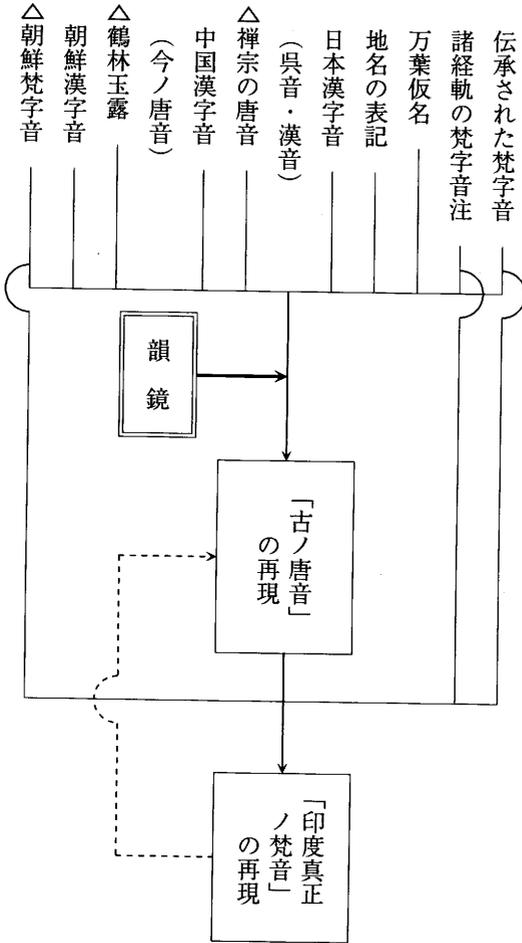
点が斬新ではあるが、他は本文と注解との錯混（と行智が判定した部分）を整理した程度で、それほど大きな校訂は行われていない。もつとも、それは第二期以降の校訂に比しての話であり、日本の悉曇学史上、これほど大胆な「悉曇字記」の校訂が行われたことはなかったのであるが。

第二期の「悉曇字記 付攷文」（文政十一年）に至って、前述のように「悉曇字記錯簡説」が採用され、本文の大幅な入れ替えが行われる。それと同時に、「悉曇字記」の現存テキストを、智広の本文、智広自身による注記、後人の注記、後人の注の注（割注）の四つの部分に振り分け、それが一目瞭然になる新テキストの作成を行ったのである。中でも、前段の摩多・正文の略説部を後人の増補と見なす点は大胆である。また、現在でもしばしば問題にされる「余国音」注記も、後人の増補と見なし、序文中の「因地隨人微有改変、而中天竺特為詳正、辺裔殊俗兼習訛文」という記述も、梵字の発音の問題ではなく、字形の問題であると解釈する点が注目される。<sup>(注6)</sup>その他、「校正悉曇字記」では縦書きのままであった十八章建立の部分の梵字も、左横書きされるようになる。

第三期の「悉曇字記正文」（天保四年刊）は、智広の「悉曇字記」の原初の形を復元することを目指したものである。後人の増補部分はもちろん、智広自身による注記と判定された部分も省略され、訓点もいっさいない白文となっている。

以上のように、行智は日本悉曇学史上、類を見ない熱意と大胆さをもって「悉曇字記」の校訂作業を行った。しかし、これが純粹な書誌学的な意味での興味と言うよりも、実際に梵語を学習するためのテキストとして、「悉曇字記」を校訂する必要があったという、実用の意味も持っていたという事は忘れてはなるまい。

行智の悉曇学の大きな目標の一つは、日本における伝承の過程で転訛した梵字の発音を、「印度真正ノ梵音」に復することであった。そして、そのためには、梵字の音注を転訛した日本漢字音や当時の中国音で読むのではなく、「古ノ唐音」によって読むべきであると考えたのである。行智が最終的に到達した方法を图示すると、次のようになる（△は材料として挙げられているものの、実際の作業では利用された形跡がないもの）。



集められるだけの漢字音に関わる材料を参照し、「古ノ唐音」を再現するのであるが、その際「韻鏡」の組織に沿って漢字音の整理を行うのである。そして、再現された「古ノ唐音」を利用して「印度真正ノ梵音」を推定するという手順を踏む。実際には、行智が推定した「印度真正ノ梵音」をも参看して「古ノ唐音」が再現された箇所があるなど、必ずしも右のような整然とした手順が踏まれたわけではなく、またそれが従来に行智研究において誤解と混乱を生む原因になったのであるが、行智の目指した方法は、いまだ西洋の比較言語学の手法が導入されていなかった時代を考慮すれば、実には確なものであったと言える。

もともと右の図のような方法は、行智の悉曇学の初期の段階から完成していたわけではない。例えば、「古ノ唐音」の再現に「韻鏡」を利用することは、第二期の「悉曇字記真釈私録玄談」に始まる（内容から、前年に刊行された「校正悉曇字記」でも、すでに利用していると推定できる）。「韻鏡」を利用していなかった第一期においては、漢字音の体系についての見通しが欠落しているため、「古ノ唐音」を再現した上で「天竺真正ノ梵音」を推定するという方針を立てつつも、実際には逆に、行智の考える「天竺真正ノ梵音」が先行し、それに合わせて場当たりの「古ノ唐音」を推定している箇所がかなりあった。その「梵音」も、行智自身が、五巻本「悉曇字記真釈」巻四において、「ka kha ga gha na」ノ五字ノ音ハ、去ヌル文化八年ナリシ、不思議ニ靈感ヲ蒙テ記得セシ所ノ音ニシテ、爾来（カシヨリコノカタ）諸梵音ニ於テ、古来ノ先哲不得ノ妙音ヲ感悟スルコトアリ」と述べており、直感で得た部分もあったようである。これが第二期にはいると、「韻鏡」という指針を得たことにより、行智の研究方法は急激な進展を遂げたのである。また、朝鮮漢字音をしきりに利用するようになるのも、この第二期からである。

第三期になると、行智の「韻鏡」研究も充実し、「韻鏡」の二百六韻と摩多、三十六字母と正文の対照表が作られ、漢字音と梵音との関係が体系的に捉えられるようになる。ここに至って、行智の悉曇学は完成を見るのである。

そして、行智の推定する「天然真正ノ梵音」そのものも、第一期よりも第二期、第二期よりも第三期と、次第に（現代の目で見て）妥当なものへと発展していくのである《別表》。

## 四

ところで、「印度真正ノ梵音」を得るためには、日本漢字音でもなく、「今ノ唐音」（当時の中国漢字音）でもなく、「古ノ唐音」によるべきであるという着想を、行智はどこから得たのであろうか？ この着想は、第一期からすでに見えるものであり、行智の悉曇学を前代までのものと画する最大の特徴である。<sup>注7</sup>

行智自身の言によれば、この着想は安然の「悉曇藏」（第五）の「上翻音中諸子注声、須檢翻譯之年代以決梵音清切。莫見四声之注字輒發五天之音響」という記述から得たものである。しかし、この「悉曇藏」の記述は、主に対注漢字の声調注記についてのものであり、ここで言われている「翻訳之年代」も、行智が考えている「古ノ唐音」の内部分での微妙な年代差のことである。行智が自説の根拠として「悉曇藏」の右の箇所を引用するのは、やや不適切であるが、結果的には正しい方向に導かれたことになる。

ところで、行智自身は、その著作の中で言及していないが、本居宣長の「漢字三音考」（天明五年刊）に以下のような記述がある。

又梵学者ハ、タゞ此ノ方ノ字音ノミヲ知テ、漢国ノ音如何ト云コトヲ問ハズ。対注ヲ皆此方ノ字音ノウヘニテ論ズル故ニ、梵音ノ要領ヲ得ザルコト多シ。サレバ梵学者モ亦必今ノ唐音ヲモ知テ、漢国ノ古ヘノ音ヲ考ヘズバアルベカラズ。畢竟今ノ世ニシテ此方ニテ、梵音ノ真ハ学ヒ得ベキニ非ズトイヘドモ、対注ノ漢字ノ古ヘノ音ト今

ノ音ト、又此方ノ漢音吳音ト、伝来ノ説ト、カレコレヲ参考シテヨクカムガヘナバ、其大体ヲバ得ベキモノナリ。  
(天竺二国ノ音)

ここに述べられていることは、行智の悉曇学の方法そのものである。しかし、行智は、八卷本「悉曇字記真釈」で、しばしば「漢字三音考」を引用しているにも関わらず、右の箇所については、まったく言及しないのである。第一期・第二期の著作に「漢字三音考」の名が見えないことから考えると、行智は、宣長の「漢字三音考」の説とは無関係に、「悉曇藏」の記述を手がかりに、自らの学問の方法を見いだしたのであり、その自負が、「漢字三音考」を参照した後も、右の記述を無視するという形を取らせたということになるのかもしれない。

ちなみに、三卷本「悉曇字記真釈」の第三卷末に、校閲諸家として、「秦鼎（秦滄浪）、河村益根、鈴木常介（胤）、服部中庸、大秀周賢、平田篤胤、陳牛和尚、荻野梅塲」の名が見え、行智はこれらの人々と第一期から交流があったことが知られる。このうち、河村益根、服部中庸、鈴木胤、平田篤胤が宣長の門人であり（篤胤は宣長没後の門人）、「漢字三音考」の発想が、これらの人々との交流から間接的にもたらされた可能性もある。

いずれにしても、「漢字三音考」の宣長の考えを実行して、実際に「古ノ唐音」を再現し、「印度真正ノ梵音」の追究を試みたのは、行智が最初であったのはたしかである。

## 五

さて、行智の最終目標であった「印度真正ノ梵音」の推定結果も、悉曇学の方法の進展とともに変化していく。《別表》に第一期から第三期までの各期を代表する著作における推定結果を掲げた。無気音・有気音の扱い、*ra* の

発音、ca sa sa sa の発音、ta 系・ta 系の発音、pa 系の発音、ra la の発音、va の発音、ha の発音、空点・涅槃点の発音等、悉曇学上注目すべき箇所は多い。特に、無気音・有気音の扱い、pa ha の発音の扱いなどは、時期により明瞭な違いがあるので、成立年未詳の著作の著述時期推定に、決定的な手がかりを与えてくれる。

本稿では、漢字音研究・江戸語音声観察などとの関わりで重要である、a 無気音・有気音の扱い、b ba の発音、c pa 系の発音、d ha の発音、e 空点・涅槃点の発音、に問題を絞って、行智の悉曇学の形成過程をたどってみる。

#### a 無気音・有気音の扱い

たとえば、梵字の ka と kha の違いは、前者が無声無気音、後者が無声有気音という発音の違いである。梵語には、無声音と有声音のそれぞれに無気音と有気音の区別があり、別々の文字が用意されている。一方、行智の悉曇学の作業原則として、梵字が異なれば、発音も異なるといふものがある。現在の目で見れば、(全く問題がないわけでもないが)至極当然の発想ではあるけれども、日本悉曇学史上、円仁等、極初期の悉曇学をのぞけば、こうした発想の例は、ほとんどない。行智は、梵字の無気音と有気音の違いも、なんとか発音の違いとして説明しようと、第一期から努力を繰り返す。

第一期には、別表のごとく、ka カ、kha キア、ga ガ、gha ギア……と有気音に対して、拗音のような音を推定している。前述したように、これらは、「不思議ニ靈感ヲ蒙テ記得セシ所ノ音」であって、漢字音の分析によって得られた音ではない。この推定音のヒントとなったものとしては、伝統的な悉曇学の「南天音||直音」「中天音||拗音」という考え方があろう。例えば、<sup>h</sup>pa の発音を、南天音「カ」、中天音「キャ」とするなどの、一字に対して複数の発

音をあてる伝承を、無気音と有気音に振り分けることによつて、自身の推定音に取り込んだと考えられるのである。ただし、行智は、十八章建立の第二章に出てくる、 $ka$  に「キャ」をあてるので、 $ka$  は「キャ」とし、「少シク口ヲ平メニ力ヲ入テ呼ヘバ、稍拗音ニ近ク」(五巻本「悉曇字記真釈」卷三)なる音として、拗音とは区別している。文字が異なれば発音も異なるという、行智の作業原則がここでも貫かれていた。

第二期にはいると、無気音と有気音の違いを考へるのに「韻鏡」を利用するようになる。梵語の無声無気音が「韻鏡」の清音に、無声有気音が次清音に対応するという指摘は、早く室町期に賢宝の「悉曇字記創学鈔」に見え、それは印融・浄嚴の著作にも受け継がれ、また、文雄は独自にその見解に達したが、第二期の段階では、行智がこれらの先学の研究の影響を受けた形跡はない。

文政二年刊の「校正悉曇字記」の梵字に振られた仮名を整理すると、別表のように、 $ka$  カ、 $ka$  カ、 $ka$  ガ、 $ka$  カ……と、濁点の位置に「無声無気音 $\parallel$ 無点」「無声有気音 $\parallel$ 単点」「有声無気音 $\parallel$ 二点」「有声有気音 $\parallel$ 三点」の補助符号を加えている。この著作自体は単なる「悉曇字記」の校本であるので、「韻鏡」利用の有無を直接知ることはできないのであるが、 $ka$  に対して「ア・ア」という表記が用いられていることから、その背後に「韻鏡」の音分類があることが判明する(後述)。そして、これらの表記によつて行智が意図した発音を、翌年の「悉曇字記真釈私録玄談」卷二の記述よりまとめると、「無気音 $\parallel$ 軽・汎」「有気音 $\parallel$ 重・強・緊」ということであつた。清濁がさらに軽重に分かれるという発想であるが、これは伝統的な韻学の用語「軽重清濁」の「軽重」とは食い違っている。いづれにしても、まだ第二期においては、無気音と有気音の相違が、息の使い方の差であるという見解は現れていない。もっとも、無気音と有気音との音声学的相違は、子音の破裂から声帯の振動までの時間差であるから、かならずしも呼気の有無にこだわる必要はないのであるが。

第三期には、基本的な捉え方には大きな変化は見られないものの、有気音に対して、「氣息（声息）ニカヲ入テ」という表現を用いるようになる。重訂八巻本「悉曇字記真釈」巻四には、次のようにある。

ka字ハ重声ナリ。其音強呼シテカト云フノミ。スナハチ前ノカ字ト声ノ生処相同ジクシテ、行位舌根喉声第二位在リ。但其前ノカヨリハ、稍重クシテ、声息ニカヲ入テカト云フヲ以テ得タリトス。其勢ヒ、云ハハ、前ノカ二字ヲ重シテカカ一声ニ合セ呼トキ、声ノ力、稍強クナルコトアリ。此意ヲ以テ呼ガ故ニ此ヲ重声ト云。韻鏡ニハ、次清行ニ列シテ、溪母ニ属スル諸字ノ音、此ニ従フ。

断氣トハ、タトヘバカ字ヲ呼ガ如キ、前ノカ字ノ輕音ナルト、声ノ出処ハ相同ジトイヘドモ、其ヲマサニ呼ントスルニ臨デ舌根喉口ノ辺ヲ上下相着タルヲ、氣息ヲ以テ排発クトキ、其勢ヒ、云ハハ、遮リ塞カリタル所ヲ、氣息シテ断破スルガ如キ意ニ声息ニカヲ入テ唱フル勢ヒヲ、形容セラレシ注意、最モ簡ニシテ言得タマヘリトオボユ。右カ字ノ音ハカノ声ヲ二重シタルカトト音相似テ、然モ彼ハ其上ニ在ル他字ノ音ヲシテ、尾声ヲ促呼セシムルコトアリ。今ハ然ラズシテ、只強呼スルノミ。

第三期に入つて息の使い方に注目するようになったのは、円仁「在唐記」の有気音に対する「断氣呼之」という注記であったのは、右の記述より明らかである。円仁が伝えた発音については、刊本として出回っていた「悉曇藏」や「悉曇三密鈔」にも引用されてはいるものの、ここでは「絶音」という語が用いられたためか、第一期・第二期の行智の研究には、影響を与えていない。行智が、円仁の「断氣」という注記に注目し、自らの梵音推定に利用するようになるのは、第三期になってからであった。

この変化に付随する形で、一見奇妙な考え方が加わってくる。すなわち、有気音（例えば  $phb$ ）が、十八章建立第十八章の「当体重」（例えば  $phb$ ）の発音に近いという考え方である（もちろん、字が異なるのであるから、発音も異なるという作業原則は貫かれる）。これは、円仁の使った「断気」という言葉が、国語の促音を連想させるものであったためである。たしかに、（閉鎖音の前の）促音は呼気の中絶と急激な開放を意識させる。そこで、国語の促音とは同じものである、梵字の「当体重」と、有気音が結びつけられたのであった。

この考え方は、第三期において、 $pha$  の発音の推定の際に大きな影響を与える。第三期には、 $pa$  は「ファ」、 $pha$  は「パ」という推定音があてられるが、この箇所のみ、他の箇所の無気音・有気音の対立との並行関係が崩れているのである。これは、国語の促音に後続するハ行音が、パ行音化する現象と無関係ではあるまい（同じく摩擦音を推定する  $pb$  系の場合と比較せよ）。有気音と「当体重」が結びつけられていたからこそその推定音である。

#### $pha$ の発音

$pha$  の発音については、漢字音研究における疑母の問題、江戸語音声観察におけるガ行鼻濁音の問題とからんで、重要である。

行智は、三巻本「悉曇字記真釈」からすでに、 $pa$  に対して鼻音性を帯びた「ンガ」を推定し、これが国語のガ行鼻濁音に相当するものであるという考えを見せている。表記面では、五巻本「悉曇字記真釈」では全巻にわたって、「梵字須知」では一部で、この音に対して「カ・キ・ク・ケ・コ」のような白圈表記を用いているが、その後は元の「ンガ」表記に戻される。

これが伝承された梵字の発音ではなく、行智が独自に思いついた音であったことは、「悉曇字記真釈私録玄談」の「旧来ノ梵学家ノ未ダ曾テ不悟所者」として挙げている十箇条のなかに、「支分ノ $\text{ṛ}$ 字ノ音千古人ノ知ルコト無シ〇今其ヲ考ヘ彰（アカ）シテ濁音ト混ゼザラシム」とあることより明らかである。行智の時代には、 $\text{ṛ}$ 字の発音は当然鼻音性を失つてはいたけれども、諸経軌の $\text{ṛ}$ 字に対する音注には、しばしば「鼻音」とあるし、また、文雄の「悉曇字記訓蒙」（注7参照）でも、 $\text{ṛ}$ 字に対して鼻音を想定しているようであるので、「千古人ノ知ルコト無シ」という表現は不適當ではあるけれども、画期的な発明であったことはたしかである。

第二期にはいると、この $\text{ṛ}$ 字の発音が、「韻鏡」の疑母と結びつけられるようになる。

そして、「今唐音」で、疑母の字が「ヤユエヨ」に近く発音されるのは、後世の訛音であると、的確な音韻史把握をする。

第三期も同様であるが、重訂八卷本「悉曇字記真釈」巻二に、「ガト注スルン字ハ正シクント呼ビハアラス、鼻声ヲ兼ル音容ヲ示スベキ為ニ、此ノ如ク記ス」とあるのが、江戸語のガ行鼻濁音の入り渡り鼻音の程度を考える上で参考になろう。

行智が、 $\text{ṛ}$ 字の発音についての着想を得たのは、諸経軌における $\text{ṛ}$ 字に対する注記や、梵字の体系において、他の五類声第五字がすべて鼻音であることからだと思われる。第一期の段階では、「韻鏡」の用語から、あるいは梵語の空点の問題から、この問題が解決されたとは考えられないからである。

梵字の pa p̄ha の発音は、その対注漢字「波・頗」などに従い、日本悉曇学では伝統的に「ハ（時にヒヤ）」があらわれる。この文字の発音は、国語のハ行子音の変遷に伴い、行智の時代には喉音化しており、「悉曇字記」にある「唇声」という注記などとも矛盾するようになっていた。この文字に対する行智の推定音は、漢字音研究の深化、江戸語音声観察の精密化に応じて刻々と変化する。

第一期の五巻本『悉曇字記真釈』巻四では、「p̄はハナリ、常ノはノ字ノ如シ。pa音ヒアファナリ。」とあり、paは伝承音のまま、paは、前述の有気音の推定音の通りである。この時期の行智は、ハ行子音のうち、フのみが唇音であるという考えに思い至っていないので、右の「ヒア・ファ」は同音を表していると考えられる。これに先立つ三巻本『悉曇字記真釈』巻三では、「paノ音ホアヘア等ナリ」とし、校閲した平田篤胤に「イカッアラム 又案ニファかヒアか○後ニ又案ニホアヘア共に悪からむ ヒアなるべし」と難じられ、五巻本ではこれを受け入れ修正したように見えるが、この時期の行智にとって、「ヒア・ファ・ヘア・ホア」は同じ発音であったとも考えられる。第二期にはいると、無気音・有気音に対する考え方が変化するので、『校正悉曇字記』で、pa p̄ha の発音は、「ハ・バ」と変更される。この時期の行智は、まだ国語のハ行音を「唇音」と扱かうことに抵抗がない。ただし、第二期の著作と判定される『悉曇字記真釈諺談』では、梵字の発音については触れていないものの、「韻鏡」の幫母・滂母の「正音（古ノ唐音）」に、それぞれハ行・バ行をあてているので、第二期の他の著作に比べると、有気音の扱いにおいて、一步第三期に近づいていると言える。

第三期に入ると、次項で扱う pa の発音を「ハ」に変更するのに伴い、pa に対して「ハ」をあてる伝統的な発音を

放棄することになる。これは、音声観察の精密化に伴い、国語のハ行音が、喉音の「ハ・ヒ・ホウ・ヘ・ホ」(pa行)と唇音の「ファ・フィ・フウ・フェ・フォ」(pa行)の二行が混合してできた行であると考えられるようになったことと表裏を為す。重訂八卷本『悉曇字記真釈』巻五には、次のようにある。

pa字ハ、輕清音、唇声ファト云フベシ。呼法氣息ヲシテ、專ラ唇ニ触テ声ヲ出ストキ、即チファト云フ音ヲ出ス、是ナリ。然ルヲ若唇ヲ開キ放チタルマ、ニテ、只ハト云フトキハ、全ク喉声pa字ノ音ニ成テ、今ノpaノ唇声ナルニ合ハズ。

pa字ハ、唇音次清強呼ノ声ニシテパト云ベシ。声ノ出ル所、前ノpa字ニ同ジクシテ、但pa字ヨリハ、稍強ク、唇ヲ合セタルヲ以テ押開クニ随ヒ、即チパト云音ヲ出ス。其声勢云ハ、前ノpa字ヲ以テ、二字重ネテppa一勢ニ呼成スガ如キ意アリ。へパト云フ音、タトヘバ遠波一派出帆ナド云トキノ波派帆ノ音ノ如クス、世ニコレヲ半濁音トモ云、是ナリ。

pa系の場合にのみ、無気音と有気音の対立を崩して、paに「ファ」、paに「バ」を推定するのは、前述の促音の問題に加えて、「ファ」と「パ」の間に、「息を断たない音」「息を断つ音」という明白な違いを見いだしたからであろう。加えて、梵語の音韻体系が無声の両唇摩擦音や唇齒摩擦音を欠いており、ここに「ファ」を使ってしまうと、他の箇所でも都合が生じないということもある。

いずれにしても、文雄が『悉曇字記訓蒙』において、唐音という有力な材料を持っていたにもかかわらず、pa字の発音に唇音を推定し得なかったことをも考え併せれば、行智のpa系の発音についての研究は、悉曇学史上、

画期的な業績であるのは確かである。

### d ha の発音

前項で指摘したように、行智は第三期に入つて、梵字  $\text{ḥ}$  に対して「ハ」という音を推定するようになる。行智のこの業績については、早く長谷部隆諦氏が注目し、高く評価している（注1論文）。しかし、この音に対する行智の考え方は、実に紆余曲折を経たものであった。

梵字の  $\text{ḥ}$  は、古典梵語では有声音である。音訳漢字では訶（曉母）・賀（匣母）などが用いられ、いずれも国語には存在しない音であった。梵字にしても、漢字にしても、伝来当初は原音の発音を保存しようと努められた形跡があるが、のちは国語音化し、カ行・ガ行の音で読まれるようになった。しかし、 $\text{ḥ}$  を「カ」や「ガ」と読んだのは、 $\text{ḥ}$  と音が重複してしまい、行智の悉曇学の作業原則に反する。そこで、第一期から、この音に対して様々な推定がなされる。

第一期の三卷本「悉曇字記真釈」卷三では、

$\text{ḥ}$  ハハノ重声ナリ。ハタゞ、作用ノ不レ加シテ、喉内ヨリシツカニ出ルマ、ニ、アト呼ノミ。今ノ  $\text{ḥ}$  音ハ喉ニカヲ入テ、一トタビ息ヲ蓄ヘ咽喉ヨリ放チ出ス時自然ニアト出ル音ニシテ、喉触音ノハトモ云ベシ。故ニ支那ニテ、例ノ的合スベキ字音無ガ故ニ、訶賀等ノ字ヲ対タレドモンレニテハ猶  $\text{ḥ}$  ト同音ニ成テ、今ノ  $\text{ḥ}$  ノ音ニハ不レ叶也。

とするが、その根拠としては、ḥib (咩) の字が伝統的に「ウン」と読まれることや、「風大ノ字、大力ノ声」であることが挙げられている。具体的にどういふ音であるのかはつきりせず、このような推定をする脈絡もわかりにくい。ここで「ア」と表記されている音は、巻一では「ヲア」、五巻本「悉曇字記真釈」巻四では「ヲャ」となっており、第一期の著作の中でも不統一である。ただし、まだこの時期は、「韻鏡」とは結びついていないので、「ア」といふ表記も、第二期以降のように、清音影母の $\text{ア}$ 行に対する、全濁音匣母の $\text{ア}$ 行という意味ではない。

第二期にはいると、漢字音との対応で、 $\text{ḥ}$  の発音が考えられるようになる。ただし、まだこの時期には、国語のハ行音を「唇音」として扱っており、 $\text{ḥ}$  と「ハ」は結びつかない。行智が使用した「韻鏡」のテキストがどのようなものであったか不明であるが、行智は、喉音の内部を清音 $\parallel$ 影母、次清音 $\parallel$ 曉母、濁音 $\parallel$ 匣母という捉え方をする(普通の「韻鏡」のテキストでは曉母は清音である)。そして表記の上では、影母 $\parallel$ ア行、曉母 $\parallel$ ア行、匣母 $\parallel$ ア行とする。従って、曉母の「訶」、匣母の「賀」で音写される梵字の $\text{ḥ}$ には、「ア・ア」という二種の音が与えられるのである。これは、次清音(無声無気音)に単点、全濁音(有声無気音?)に二点を与えるということであり、前述した五類声の無気音・有気音の表記に全く平行するものである。

梵字の発音そのものは、第一期と同様に「阿ノ重声」としてしているのであるが、「悉曇字記真釈諺談」巻五に「第一ノ影母ハアイウエオノ音此ニ撰ス。第二ノ曉母ハ、 $\text{ḥ}$ ノ重音稍近ハニ喉声(ノンド)ニテハヒフヘホト呼ブ音収レ之。梵語ノ摩訶沙訶ナドノ訶ノ字此ニ有テ、旧唐音阿ノ重音ハニ近ク呼ブ類ヒ、此内ニ撰ス。第三匣母アイウエオノ濁音ニテアイウエオト呼ブ音ト、及ビワヰウエヲノ音此ニ撰ス。」とあるように、その具体的発音が、国語のハ行音に近い音である(この期は、ハ行音はあくまで唇音である)と明確に述べられている。第一期には、曉母の字をカ行音と捉えていたことを考えれば、漢字音研究の面でも、この期に大きな前進があったと言える。そして、この前進の

決め手になつたのが、唐音の参照であつたことは、第二期以降にこの問題を論じる際、しばしば唐音に言及されることからも明らかである。

ちなみに、同書卷六や、松浦静山の「甲子夜話」正篇卷五十六「五」<sup>(注)</sup>に引かれる行智の見解では、ハンゲルの  $\text{pa}$  が、同じく「ア」であるとする。

第三期になると、前述したように、 $\text{pa}$  の伝統的な読み方「ハ」を放棄すると表裏をなす形で、 $\text{pa}$  に対して、直接「ハ」をあてるようになる。重訂八卷本「悉曇字記真釈」巻五に、次のようにある。

$\text{pa}$  字ハ、喉声ナリ。(中略) コノハ音、頗ル今ノ  $\text{pa}$  字ノ声ニ合ス。然ルヲ今ハノ仮字モテ注シタルヲ見テ、唇音  $\text{pa}$  ファニ混ジテ、同声ナリト思フベカラズ。(中略) 凡ソ  $\text{pa}$  字ノ対スル所字類ハ、多ク曉匣二母ノ所屬ニシテ、此ヲ唐音ニ從テ呼トキハ、曉母ハ阿ノ次清音ニシテ、所屬ノ字ミナ、喉声ニ從テ、ハヒ|ホウ|ヘ|ホト云フベク、匣母ハ阿ノ濁音ニ似テアイウエオト同ク喉声ニ洪大ニ呼ヲ以テ得タリトス。

ここでは、影母  $\text{h}$  行、曉母  $\text{h}$  行、匣母  $\text{h}$  行という図式が成立している。五類声の無気音・有気音との平行関係は崩れてしまつたが、この期の  $\text{pa}$  の発音、曉母の発音についての考え方の変更が、行智の韻学の最も成功した部分であるのは、言を待たない。そして、前項の  $\text{pa}$  系の発音の場合と同様、この進展は、行智の江戸語音声観察の精密化によって成し遂げられたものである。

漢字音研究史から見た場合、行智の曉母の発音についての「発見」は、それほど注目されないようである。なぜなら、行智以前の漢字音研究においても、唐音の曉母がハ行音となることは周知のことだつたからである。しかし、

現実に存在するものではなく、過去の発音の復元として、曉母にハ行音をあてるという行為自体が、江戸期の他の漢字音研究とは全く異質なものである。文雄が『悉曇字記訓兼』において、唐音を利用していながら、ついに梵字の ha と「ハ」を結びつけられなかったことを考えると、行智の研究の獨創性が、さらに際だつてであろう。

e 空点・涅槃点の発音

空点  $\text{h}$ ・涅槃点  $\text{p}$  の発音は、梵字の十八章建立第十五章と第十八章、漢字の鼻音韻尾と入声韻尾、国語の撥音と促音の問題に平行し、行智の考え方も複雑な展開を見せる。煩を避けるために、本稿では、行智の漢字音研究・江戸語音声観察を考える上で必要と思われる点のみを挙げる。

第一期においては、三内空点音は、それぞれ「ン」に近い「ウ（喉内）」「ヌ（舌内）」「ム（唇内）」であった。これが、第二期にはいると、三内空点音は「シグ（喉内）」「ヌ（舌内）」「ム（唇内）」に改められ、単独では三内に涉る「ン」が、言語連用の際には下に続く音によって分かれるのであるとする。これは国語の撥音の音声観察という見地からも注目される。また、この時期には、空点の問題が漢字音の鼻音韻尾の問題と結びつけられるので、右の三内空点音は、それぞれ喉内鼻音韻尾・舌内鼻音韻尾・唇内鼻音韻尾にも引き当てられる。ただし、正確には、「古ノ唐音」の喉内鼻音韻尾が「シグ」であったとするのではなく、上古正音が「シグ」、旧唐音が「ウ」であったとする。さらに、第三期には、上古正音が「シグ」、旧唐音が「ン」と修正される。

行智の漢字音研究で最も著名な、喉内鼻音韻尾に「シグ」をあてる考え方は、このようにして第二期に出てきたものであるのだが、そのきっかけとなったのは、この期から積極的に参照されるようになった朝鮮漢字音であったと考

えられる。朝鮮漢字音では疑母の子音と喉内鼻音韻尾と同じ記号が用いられるので、行智はそこに国語のガ行鼻濁音に相当する音をあてることになった。ちなみに、行智の仮名表記では、朝鮮漢字音の喉内鼻音韻尾は、「グ」「ング」「ギ」であるが、「グ」表記の場合も、行智にとつては語中のガ行音が鼻音である以上、鼻音性を帯びていることになる。一方、梵字の𑖀は第一期から鼻音「ガ」と推定されており、この字が喉内空点音に相当することも、第一期から行智に了解されていた。それにもかかわらず、第一期には喉内空点音は「ン」に近い「ウ」と推定されていたわけである。それが第二期に入つて変更されたのは、行智が「古ノ唐音」推定の主要な材料とした、日本漢字音・中国漢字音（今ノ唐音）・梵字の発音に、新たに朝鮮漢字音が加わつたことによつて、「多数決の原理」が働いたからであると考えるのが妥当である。

涅槃点にかかわる問題として、最も注意されるのが漢字音の舌内鼻音韻尾である。本来涅槃点は、喉内入声韻尾で写されるような音であるので、舌内入声韻尾とは結びつかないものである。しかし、伝統的な悉曇字の連声説において、空点との対照上、三内涅槃点音という考え方が現れ、涅槃点と三種の入声韻尾が結びつけられたため、行智も涅槃点の問題の中で、舌内入声韻尾を取り扱っているのである。

梵語の音写漢字において、*dhāra* 達磨、*śarva* 薩嚩、*karma* 羯磨のごとく、舌内入声韻尾が梵字のハに対応することがある（常に対応するわけではない）ことは、日本悉曇学でも早くから気づかれてきたことである。宣長の「漢字三音考」でも、このことは指摘されている。行智も、第一期からこのことを問題にしており、入声の韻尾に「フツクチキ」の他に「ル」もあるのだという説明をする。第二期にはいると、舌内入声韻尾がすべて「ル」となる朝鮮漢字音が資料に加わり、行智はこの考えに更に自信を持ったようである。ただし、「悉曇字記真釈諺談」に、「古ニハ此方ノ入声、及び梵音対訳ノ達（ダル）羯（カル）薩（サル）等ノ音ノ如クフツクチキリルノ七韻ヲ明白ニ

唱へシコトナレバ」「質櫛等ノツ韻ノ字ヲバ、古代多クハル韻ニ呼リ」などの記述があるので、「古ノ唐音」において、舌内入声韻尾がすべて「ル」であったと考えていたのではないことが知られる。

第三期にはいると、傍証として挙げられる事例は多岐に渉るようになり、考証もいよいよ綿密になる。重訂八卷本『悉曇字記真釈』卷三では、「唐国旧時ノ音ニテハ、総テコレ（舌内入声）ヲラリルロ等ニ結ヒ留ルコトナリ」とし、「中葉已来」この「活用」がなくなり、「唐ノ末世宋ノ前ツカタノ頃ニヤ有ラム、古代ノ字音ハ総テ改リ変シテ、近時イハユル唐音ト云フモノ、如クナリタルヨリ……」と述べる。舌内入声がすべてラ行音であったというのは、朝鮮漢字音からの発想であろうし、ラ行に活用するというのは、梵字の結合文字の読み方や、日本漢字音の入声韻尾、地名の漢字表記などからの発想であろう。

## 六

以上、行智の学問の発展過程を、悉曇学を中心に概観した。伝承の過程で転訛した日本式の梵字の発音を大胆に退け、「印度真正ノ梵音」を求めるといふ試み自体が、日本の悉曇学史上、極めて類例を見いだすににくいことである。そののみならず、その手段として、まず「古ノ唐音」を復元する必要があったため、結果的に、日本漢字音研究史上も特異な研究が行われることになったのであった。そして、行智が最終的に到達した梵語・漢字音研究方法は、当時参照し得た資料の限界を考慮すれば、実には確なものであった。唐音と「韻鏡」を利用することによって梵字の発音をただそうとした、文雄の『悉曇字記訓蒙』も、悉曇学史的には興味深いものであるが、行智は、それより更にすぐれた方法を、文雄とは無関係に独創し、かつ成果を上げたのである。

もちろん、行智の悉曇学史上希有の研究を可能ならしめたものが、「韻鏡」研究が飛躍的に発展・充実した江戸後

期という「時代」であったのは明白である。文雄・宣長の研究以前には、行智の悉曇学もあり得なかつたのである。加えて、しばしば言及されるハングルの他に、大槻玄沢・玄幹親子との交流によって学んだと思われるオランダの文字、馬場佐十郎との交流によって学んだと思われるロシア文字、他にも八思巴文字や満州文字を学習するなど、行智は世界の文字を貪欲なまでに学んでいる。これらの知識によって、五十音図にとらわれずに、子音と母音を分離して国語の音を把握することが可能になり、また、梵字の構成をも的確に理解できるようになったのであると考えられる。最後に、行智自身の「印度真正ノ梵音」についての態度を確認しておく。行智は、自分の推定した音に対して、かなりの自信を持っていたことが、その叙述の端々から窺われる。しかし、『梵字名目』に「タトヒ訛音ニモセヨ、禪門ノ如ク唐音ニテ誦ニモセヨ、志深ク一心ニ誦持スルニヨリテコソ功用ハアルコトナリ」とあるように、行智は世間で行われている梵字の発音が修正されるべきであるとは考えていなかったことは、指摘しておかなければならない。音よりも志を重んじる点が、行智が音韻学者である以前に僧侶であつたことを思い出させる。

#### 終わりに

本稿は、国語学の立場から、行智の漢字音研究・江戸語音声観察を正確に理解するための下準備を意図したものである。以上のように行智の悉曇学の発展過程を辿ってみると、その時期によって、行智の考え方は確実に変化し、また同じ用語が指すものにずれがある場合もあることがわかる。そして、漢字音研究や江戸語音声観察を考える場合にも、それぞれの時期の行智の悉曇学の考え方、その段階に手元にあつた資料は何であるのか、用語の使い方に変化はないかということ、常に参照する必要があるのである。また、考え方の変化を辿ることによって、はじめて最終的に到達したものの意味を正確に理解できるようになるということがあることは、本稿で触れてきた諸問題からも知ら

れることである。行智の場合にはたまたま資料に恵まれているのであるが、研究史一般を扱う場合にも、このことは常に念頭に置いておかなければならないことなのであろう。

## 注

- (1) 新村出「日本音韻研究史」(明治三十年)『新村出全集』第一卷所収)  
 長谷部隆諦「ㄅ字の音に就いて」(『密教研究』第二号 大正十五年)  
 中里龍雄「梵学驗者行智を憶ふ——帝大池畔の碑を見て——」(『宗教研究』新第九卷第一号 昭和七年)  
 同「新資料による行智阿闍梨伝」(『修験』五五 昭和七年)  
 金沢庄三郎「濯足庵藏書六十一種」(昭和八年)  
 同「亜細亜研究に関する文献——濯足庵藏書七十七種——」(昭和二十三年)  
 牛窪弘善「修験道学匠考」(三)「修験」八三 昭和十二年)  
 渡辺英明「行智師の音韻研究概説——音韻学的述作中に於けるものを中心として——」(『密教研究』六一・六二 昭和十二年)  
 岡田希雄「日本梵語辞書史概説——心覚より江戸期まで——」(『立命館大学法文学部文学科創設記念論文集』昭和十八年)  
 同「行智の梵語辞書『両面錦』」(『龍谷学報』三三三二 昭和十七年)  
 田久保周誉「批判悉曇学」(昭和十八年)  
 橋本進吉「近世国語学史」(『橋本進吉博士著作集』第九・十册所収)  
 古田東朔「国語学史」(昭和四十七年)築島裕氏との共著  
 石村喜英「梵字事典」(『歴史編執筆』昭和五十二年)  
 水谷真成「梵語字典」(『梵漢対訳字類編』の影印及び解説 昭和五十四年)  
 金山正好「梵字悉曇」(田久保周誉氏の補筆部分 昭和五十六年)

- (2) 湯沢質幸「唐音の研究」(昭和六十二年)  
 同「日本漢字音史論考」(平成八年)
- (3) この著の刊行が予定されていたことは、「梵漢対訳字類編」の無覚による跋文から知られる。また、「悉曇字記 付攷文」  
 「悉曇字記真釈私録玄談」の行智自筆本には、罨入りで、柱に「悉曇字記真釈卷」と印刷された「原稿用紙」が用いられており、あるいは「悉曇字記真釈」の出版と関わるものなのかもしれない。
- (4) 田久保周著「批判悉曇学」(昭和十八年)
- (5) 私見では、後段部分(B・Cの部分)は、本来悉曇章の形であるべきものが、抄録されたもの。すなわち、「悉曇字記」は、序、摩多・体文の解説、十八章建立の解説、悉曇章という構成が意図されていたのではないだろうか。
- (6) 拙稿「悉曇学書に見られるインドの諸方言について——「具音」「漢音」を理解するために——」(築島裕博士古稀記念国語学論集)平成七年)で、「余国音」の問題について取り扱ったことがある。
- (7) 文雄「悉曇字記訓蒙」(成立年未詳)も、日本に伝承される梵字の発音を転訛したものとして排し、「韻鏡」と唐音を利用して、梵字の発音の復元を目指す。ただし、利用された唐音は、当時の中国漢字音である。この書は、存在そのものがほとんど知られておらず、「古典籍総合目録」に、都立中央図書館に蔵される一本を載せるのみであるが、悉曇学史的には、極めてユニークな存在であり貴重。
- (8) (注7)の文雄の著作が、その珍しい例である。
- (9) 平凡社東洋文庫本による。「甲子夜話」の著者、松浦静山は、行智の「隣人」であり、同書には多くの行智にかかわる記事がある。

《別表》

○	㇀	㇁	㇂	㇃	㇄	㇅	㇆	㇇	㇈	梵字	
										五卷本	第一期
オ・アオ	アエー・オエー	アエ・エ	ウ、	ウ	イ、	イ	ア、	ア	五卷本	【悉曇字記真釈】	第一期
オ	アエ、	アエ	ウ、	ウ	イ、	イ	ア、	ア	【校正悉曇字記】	第二期	
オ(オ、)	アエイ	アエ	ウ、	ウ	イ、	イ	ア、	ア	重訂八卷本	【悉曇字記真釈】	第三期

行智の悉曇学とその発達段階―肥爪

na	ンネヤ・ニア	ンニア	ンニア
ja	ジャ	サ	サ
cha	シャ	ザ	ザ
ca	サ	サ	サ
na	カ	サ	サ
gha	ギア	カ	カ
ga	ガ	ガ	ガ
kha	キア	カ	カ
ka	カ	カ	カ
ah		ア	ア
am		ア	ア
au	オー・アオー	オ、	オ、

ba	pha	pa	na	dha	da	tha	ta	na	dha	da	tha	ta
バ	ピャ	ハ	ノア・ヌア	デア	ダ	テア	タ	ナ	ヂャ	ヅァ	チァ	ツァ
バ	ハ	ハ	ンナ	タ	ダ	タ	タ	ンナ	ツァ	ヅァ	ツァ	ツァ
バ	パ	ファ	ナ	タ	ダ	タ	タ	ンヌア	ツァ	ヅァ	ツァ	ツァ

ksa	llam	ha	sa	sa	sa	va	la	ra	ya	ma	bha
		ヲ コ ァ	ソ ア	シ ア	ス ヤ	ワ	ラ	ア ル ヤ	ヤ	マ	ビ ア
キシヤ	ラン	ア ・ ア	ソ ア	シ ビ ア	シ ア	ワ	ラ	ラ	ヤ	マ	ハ
ク ス ヤ	ラン	ハ ・ ア	ソ ア	ス イ ヤ	シ ア	ワ	ラ	ラ	ヤ	マ	ブ ア